

# 宇都宮城の変遷をたどる

宇都宮伝統文化連絡協議会 柏村 祐司

宇都宮城址公園が開園した

のは、平成十九年である。かつての御本丸の約半分ではあるが、清明台、富士見櫓、石垣と土塁、土塀および堀が復元された。復元規模は小さいが、それでも市当局は、復元に当たって大変な苦勞をされた。民有地を買取るとともに何よりも宇都宮城は、徹底的に破壊されていたからである。

宇都宮城築城の由来については、藤原秀郷が築いたとも初代城主の宇都宮宗円が築いたともされるが確証はない。ともあれ鎌倉時代には宇都宮氏の居城としてあったことは確か



宇都宮御城内外絵図  
(宇都宮市教育委員会提供)

である。

宇都宮城は、地の利を利用して築かれた。市街地の地形は、田川低地、それから一段上がった田原台地、さらに一段上がった宝木台地からなる。田川低地には、築城以前から町人町があったと思われる。宇都宮城が築かれたのは、田原台地、それも東の端、段丘崖に沿った所である。田原台地は台地であっても釜川が流れるように、地下水層が浅く井戸を掘るのが容易であり人々の生活はできる。また東端の崖に沿った所は、崖下に田川が流れ防御には打つつけの所であったからである。

城址は館を中心に土塁や堀がせいぜい三重に取り囲んだもので、その城内に家来の屋敷が展開した。なお、城を宇都宮大明神に近接し真南に築いたのは、宇都宮氏が大明神の社務職という重要な役割を担っていたからとも思われる。こうした城のあり様は、

郊外へ移転する等町並みの改修も行った。この結果、宇都宮城および城下の街並みは、幕府の信任厚い大名に相応しいものとなったのである。

ところが名城と呼ばれた宇都宮城が悲運にも跡形もなく破壊される時代が訪れた。初めは戊辰戦争により戦火を蒙ったことによる。その後明治新政府によつて廃城令が出され、また城が民有化されたことも城の破壊に大きく関わった。石垣が少ない土塁や堀は、次々と崩され埋め立てられ、市民に親しまれた御本丸の土塁や堀も昭和三十年代に消滅し名城は潰えた。

宇都宮市内には歴史的な建物等が少ない。宇都宮城の復元を機に、歴史を取り込んだ街作りをさらに進めたいものだ。歴史を感じない街は、空虚な感じがする。そのようなことがないためにも。

宇都宮氏時代はもとより、宇都宮氏が滅亡したあと江戸時代初期まで続く。それが劇的に変わるのは、元和五(一六一九)年、宇都宮城主となった本多正純の時である。正純は、従来三の丸までであった城域を、二倍以上の面積に広げ、東は田川まで、北は釜川まで、西は松が峰外へ土塁を築き空堀を築造、南は不動前まで外堀、土塁を作ったのである。本丸には將軍の日光参詣の際に宿泊する御座所を設け、城主の御殿は二の丸に置いた。

三の丸太鼓門前に三日月堀を造り、大手門を宇都宮明神前から西北の江野町口に移し、馬出し堀を設ける等をした。

一方、従来の奥州道と日光道をつけ替え、不動前から伝馬町まで同じ道にし、そこで分岐するとともに、日光道・奥州道沿線には町人屋敷を配置、町人屋敷を挟んで両側に武家屋敷を設けた。また桂林時や光琳寺等旧城郭近辺にあった寺院を



復元された富士見櫓  
(宇都宮市教育委員会提供)